博士学位論文審査要旨

2007年11月26日

論文題目：　社会的感情としての“あがり”の精神生理学的機能に関する研究
学位申請者：　敦賀　麻理子
審査委員：
　主　査：　文学研究科　教授　鈴木　直人
　副　査：　文学研究科　教授　岡市　廣成
　副　査：　文学研究科　教授　佐藤　　豪

要　　旨：

本研究は，“あがり”をひとつの社会的感情として定義し、その主観的反応および精神生理学的反応を実験的に検討し，社会的感情における精神生理学的機能の役割について考察したものである。本論文は7章、5研究から構成されている。

第1章では，感情心理学の精神生理学的研究の系譜や，最近の社会的感情への関心の高まりとその精神生理学的、実証的研究の欠落の現状とその原因を概観した。第2章では，“あがり”の研究を概観した。日本語において“あがり”と呼ばれる状態は，外国ではその状態を引き起こす課題に特化した不安状態(例：スピーチ不安)として定義され，課題の種類に応じてそれぞれの不安が想定されてきた。しかし、それらは結局のところ心理学的に同じ現象を指しているため，“あがり”という呼称を用いることが有用であることを提案した。

第3章から第5章では，実験室において“あがり”を実験的に喚起した4つの研究の結果を報告した。これらの研究では，“あがり”を喚起する実験条件には観察者を前にしたスピーチを，また統制条件には音読を課題として用いた。“あがり”の心理的反応指標として“あがり”の主観的反応と主観的覚醒感，精神生理学的指標として，心臓血管系反応と呼吸率を測定した。第3章では，日常的に“あがり”と呼ばれる状態が状態不安とは異なる特徴を持つものであり，独立した感情として扱うことが妥当であると考察した。また，“あがり”喚起時には，主観的活性感が上昇し，脱活性感が低下すること，心拍率，血圧，および呼吸率の反応が増大することを示した。第4章では，“あがり”の強度について検討した。研究2では“あがり”の強度は課題に左右されるものではなく，社会的場面で課題を行うという状況が主な規定因である可能性を示した。研究3では，課題前に測定した主観的“あがり”の得点に基づいて群分けし，統制群を含めた3群間で精神生理学的反応を比較し、感情の主観的側面と精神生理学的側面が反応の強度という点では必ずしも共変化しないことを示した。第5章では，同一の場面を反復して経験させ、主観的“あがり”と心拍率は慣れの反応を示すのに対し、血圧には慣れが生じない可能性を示した。

第6章は，卒業論文の面接試験場面を対象とし、実際の“あがり”喚起場面における主観的反応と心拍率の変化を検討し、実際場面においてはより生理的覚醒が高まることを示した。

以上5つの研究結果を踏まえ，第7章では社会的感情としての“あがり”の特徴を概説し，“あがり”における生理的覚醒の役割や，人が“あがる”ことの意味について議論を展開した。

本論文は，“あがり”が不安とは異なる独立した感情であることを実証し、またその発現過程、経験による影響、さらには実際場面における“あがり”を心理的、精神生理学的に検討したもので、社会的感情に関する従来にない多くの知見を提供するものである。よって本論文は，博士（心理学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認める。

総合試験結果の要旨

2007年11月26日

論 文 題 目： 社会的感情としての“あがり”の精神生理学的機能に関する研究
学位申請者： 敦賀 麻理子
審 査 委 員：
主 査： 文学研究科 教授 鈴木 直人
副 査： 文学研究科 教授 岡市 廣成
副 査： 文学研究科 教授 佐藤 豪

要 旨：

上記審査員3名は、2007年11月26日午後2時から約2時間にわたり、学位申請者に面接試問を行った。提出論文に対する質疑に対して、適切な応答と説明がなされ、本論文の学術的価値が実証された。さらに申請者は感情心理学はもとより、精神生理学、心理学一般についての十分な知識を有することが認められ、引き続き行った語学試験(英語)についても十分な学力を確認することができた。

以上より、総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： 社会的感情としての“あがり”の精神生理学的機能に関する研究
氏　　名： 敦賀　麻理子

要　　旨：

感情の心理学的研究は，文化を越えて普遍的に観察されると云われている喜びや怒りなどのいわゆる“基本感情”を対象として発展してきたが，近年，社会生活において他者との関係の中で経験される感情に対する関心が高まりつつある。それらの感情は社会的感情と呼ばれ，代表的なものとしては恥(shame)や罪悪感(guilt)，嫉妬(jealousy)，羞恥心(embarrassment)といったものが挙げられる。社会的感情の研究は，これまでに主に質問紙調査によって知見の蓄積がなされてきており，例えば，恥や罪悪感を経験する傾向と，共感性などの性格特性との関連(Tangney, 1991)や，抑うつや不安などの精神病理との関連(Tangney, Burggraf, & Wagner, 1995 など)が報告されてきた。また，神経科学の分野においては，社会的感情の神経基盤を検討する動きが見られるようになり，脳損傷患者を対象とした臨床的研究では，前頭葉損傷の患者に社会的，道徳的感情の障害が一貫して認められ，前頭葉が社会的感情の生起に深く関与している可能性が指摘されている(Eslinger, Grattan, Damasio, & Damasio, 1992 など)ほか，健常者を対象として，スライド呈示やイメージによって罪悪感などの社会的感情を喚起させ，神経イメージング技法を用いて社会的感情の喚起時に活動する脳部位を同定する試みが行われている。このように社会的感情の神経基盤が活発に議論され始めた一方で，社会的感情の喚起時に生じる末梢の生理学的反応を検討した研究はいまだ少ない。本研究は，社会的感情の主観的反応および精神生理学的反応を実験的に検討し，社会的感情における精神生理学的機能の役割について考察したものである。

本論文の第 1 章では，感情心理学の精神生理学的研究の系譜や，社会的感情への関心が高まる一方で社会的感情の精神生理学的研究が欠落している現状とその原因を概観した。感情の精神生理学的研究は，スライドや映像の呈示や，イメージによって目的とする感情を喚起させ，その時の精神生理学的反応を測定してきたが，恥や罪悪感といった社会的感情は，他者の存在や評価などの社会的文脈において喚起されるものであり，実験的に喚起することが困難である。このことが，社会的感情の精神生理学的研究を妨げてきた理由であると考えられる。しかしながら，近年，ストレスと心臓血管系反応の関係を検討する精神生理学の分野では，社会的場面を実験的に再現し，社会的要因が精神生理学的反応に及ぼす影響を検討しようとする研究が増加しつつある (Christenfeld, Glynn, Kulik, & Gerin, 1998 など)。それらの研究においては，他者による観察や課題遂行の評価を伴うスピーチが用いられている (Bagett, Saab, & Carver, 1996)。スピーチは実験的に喚起しやすく，生理的反応の顕著な亢進を引き起こすとされているが，それだけでなく，われわれが日常的に経験しうる社会的感情を喚起するものであると考えられる。このような場面において経験される主観的状態を日常語では“あがり”と呼ぶ。この“あがり”をひとつの社会的感情として定義し，精神生理学の研究において用いられてきたスピーチ状況を課題とすることで，実験的に社会的感情を喚起することが可能であると考えられた。そこで，本論文は社会的感情としての“あがり”の主観的反応，精神生理学的反応の特徴を明らかにし，社会的感情における精神生理学的反応の機能を考察することとした。

第 2 章では，“あがり”の研究の系譜について述べた。日本語において“あがり”と呼ばれる状態は，英語の文脈では，その状態を引き起こす課題に特化した不安状態(例：スピーチ不安，競技不安)であると定義され，課題の種類に応じて無数の不安が想定されてきた。しかしながら，それらは結局のところ心理学的に同じ現象を指しているようであるため，どのような場面で経験されたかは問題と

しない“あがり”という呼称を用いることが有用であると提案した。また，“あがり”を独立した固有の感情であると考える心理学的研究が見られるようになってきたことや，“あがり”が生理的，身体的反応に強く特徴づけられる感情状態であると捉えられてきたことから，“あがり”において精神生理学的反応を検討することは妥当性だと考えられた。

第3章から第5章では，実験室において“あがり”を実験的に喚起した4つの研究の結果を報告した。これらの研究では，“あがり”を喚起する実験条件には観察者を前にしたスピーチを，また対照となる統制条件には音読を課題として用いた。“あがり”の心理的反応を検討した先行研究(有光・今田，1999)において作成された尺度によって主観的“あがり”の反応を，またその他の主観的反応として主観的覚醒を測定し，精神生理学的指標としては，主に心拍率，血圧といった心臓血管系反応と呼吸率を測定した。

第3章の研究1では，日常的に“あがり”と呼ばれる状態が，これまで不安の概念を用いて検討されてきたことに対して，状態不安尺度と主観的“あがり”の測定に特化した尺度の得点の変化を比較し，“あがり”が不安とは異なる特徴を持つものであり，独立した感情として扱うことが妥当であると考察した。また，“あがり”喚起時には，主観的活性感が上昇し，脱活性感が低下すること，心拍率，血圧，および呼吸率の反応が有意に増大することが明らかとなった。

第4章では，“あがり”の強度について検討した2つの研究結果を報告した。研究2では“あがり”の主観的反応の強度の違いをもたらす要因として遂行する課題の種類を想定し，観察者を前にしてスピーチを行う条件と，詩の暗唱を行う条件で主観的反応および精神生理学的反応の差異を検討した。個人の考えを述べるスピーチ条件の方が単純に内容を諳んじる暗唱条件よりも主観的な“あがり”が強く喚起されると予測としたが，結果として，両条件の間で主観的“あがり”にも精神生理学的反応にも有意な差異は認められなかった。この結果は，2つの課題が共に発話を伴う質的に類似したものであるという点で限界があるものの，“あがり”の強度がどのような課題を行うかということに左右されるものではなく，社会的場面で何らかの課題を行うという状況が主たる規定因となる可能性を示したといえる。

研究3では，主観的“あがり”の個人差に着目した。スピーチ課題によって“あがり”を喚起させ，課題前に測定した主観的“あがり”の得点に基づいて事後的に主観的“あがり”の高かった群(高喚起群)と低かった群(低喚起群)に群分けし，統制群を含めた3群間で精神生理学的反応を比較した。その結果，心拍率については，統制群を介して高喚起群と低喚起群の間に間接的に差が認められたが，その他の精神生理学的指標は高喚起群と低喚起群の間で有意な差は認められず，感情の主観的側面と精神生理学的側面が反応の強度という点では必ずしも共変化するものではないことを示した。

第5章では，同一の場面を反復して経験することによって“あがり”反応に慣れが生じるかを検討した研究4の結果を報告した。同じ課題場面を1週間おきに合計3回経験した結果，主観的“あがり”と心拍率は回数に応じて有意に低減し，慣れの反応を示したが，血圧には慣れが生じない可能性が示された。生体は，課題に対処するために必要な程度に生理的覚醒を保つために血圧を調節する(澤田,2001)とされていることから，血圧に慣れの変化が生じなかったという研究4の結果は，経験を反復しても，課題遂行そのものが生体に与える影響は変化しないことを表していると考えられる。

第6章においては，実際の“あがり”喚起場面における主観的反応と心拍率の変化を検討したフィールド研究(研究5)の結果を報告した。大学生の卒業論文の面接試験場面を対象とし，試験開始30分前から試験終了後30分までの主観的反応と精神生理学的反応の変化を測定した結果，主観的“あがり”は，試験の開始が迫るにつれて上昇し，試験後には時間の経過とともに減少していった。また，心拍率も試験開始前から試験中にかけて増大し，試験後に減少するという変化を示したが，試験開始30分前の時点で安静時に比べてかなり高い値を示し，実験的に喚起した“あがり”場面よりも実際場面において生理的覚醒がより高まることが示された。

以上5つの研究結果を踏まえて，第7章では社会的感情としての“あがり”の特徴を概説し，“あ

がり”における生理的覚醒の役割や，ひとが“あがる”ことの意味について議論を展開した。本論文で報告した研究の結果は，“あがり”が不安とは異なる独立した感情であり，遂行する課題の種類によってその主観的反応の強度が規定されるものではないこと，また主観的活性感が高まり，脱活性感が低下すること，精神生理学的側面については，心拍率の増大を伴った血圧上昇を示すことを明らかにした。その一方で，“あがり”喚起時の血圧が，個人間でも個人内の変容でも主観的感情とは対応せず，一定の反応水準にとどまるものであることが示され，“あがり”喚起状況に対処するために必要な生理的覚醒が感情の強さの関数として増減するものではないことが明らかとなった。本研究の結果からは，社会的状況においては，それをどのように感じるかという感情的反応とは別に，状況に対処するための強い動機づけが働き，そのような動機づけによる行動の発現を支えるものとして，社会的感情の精神生理学的反応が存在する可能性が考えられた。